

日本基督教団 東中国教区ニュース



東中国教区
 教区ニュース誌委員会
 〒110-0001
 倉敷市鶴形一五十五
 倉敷キリスト会館内
 Ⅷ(八)四二二一七〇

クリスマスメッセージ

倉敷水島教会 牧師 松井 初

クリスマスの季節といえば降誕劇を楽しみにしている子どもたちもおありだと思います。降誕劇での人気のある役は、マリア役であるとも言えます。そのハイライトの一つは、ルカによる福音書の一章二六節以下のマリアの受胎告知のシーンといえましょう。この受胎告知の場面は、絵画など古来様々なモチーフになるほど有名なシーンであります。この物語はマリアが、天使ガブリエルからいきなり《おめでどう、恵まれた方》と言われて不安がりました。誰でもこの場面に出くわしたら不安がられますね。しかし、天使は、《すると、天使が言った。「マリアよ、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。三一 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。》とマリアに告げました。

マリアは天使に反論して、《どうして、そのようなことがあるでしょうか。わたしは男の人を知りませんのに。》と答えました。マリアは当時の常識である律法との関係を理解していました。夫ヨセフの婚約者であり、この天使の言葉に従うと律法の規定により死をも覚悟するがゆえに、一度はこの言葉を断りました。ここで天使は不妊であったエリザベトの洗礼者ヨハネの懐妊を告げて、神の偉大さをマリアに強調して説明しました。最後にマリアは《神にできないことは何一つない。》との天使の言葉で神と正対し、自らのすべてを明け渡したのです。マリアは《わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように。》とこのシーンは締めくくられています。

一見非常識であり、不条理と思えるこの場面でもマリアは世を超えたところ神の恩寵を感じ、これによって神の御旨に従う思いにさせられました。自分の景観や常識のみで判断するならば、新しい時代の始まりを理解できず、前段落のザカリヤのように常識的な確信を得ようとします。そこにおいて神の言葉を信じることをできないのです。私もこの受胎告知の場面を見る時、果たしてマリアなのかザカリヤなのかと悩むことがあります。しかし名もなきおとめに起きた出来事は、私たちお一人ひとりに起きて、この世の世界から御国へと誘われたのであります。この事実は、天使ガブリエルではなく主イエスの御言葉と働きかけによって、《主のはしためです。お言葉ど

目次

巻頭言 クリスマスメッセージ	1
教区の集い報告(ゲスト記事)	2
教団総会報告(松田さん丸山さん)	4
教育委員会主催ワークキャンプ	6
按手礼式報告・受按者の言葉	7
沖縄訪問ツアー	8
教会紹介 岡山博愛会協会	8
最後部 編集後記	8



《クリスマスメッセージ》

おり》と主の僕として新たな命で生かされていることをここで思い返す時を迎えています。

私のもう一つの受胎告知の出会い、中学生の時にビートルズのレット・イット・ビーを聴いていた時父に、「この曲名は受胎告知じゃない」と言われて英国新欽定訳聖書のルカによる福音書一章二八節に、「Let it be to me according to your word」《お言葉どおり、この身に成りますように。》と記されてきました。確かに歌詞には聖母マリアが私に来て、賢き言葉をもって Let it be と言っています。この複雑な現代社会においても、おとめマリアの言葉が生きていることに驚くと共に、聖書の奥深さを改めて知った時でした。

かかわらなければ

「トーク&詩の朗読」

岡山教会 沢 知恵 (歌手)

はじめに、私が幼いころからかかわりを
持っているハンセン病療養所大島青松園で、
十三歳から亡くなるまでの七十年間を暮ら
した高見順賞受賞の詩人、塔 和子の詩を朗読
しました。



胸の泉に

塔 和子

かかわらなければ

この愛しさを知るすべはなかった

この親しさは湧かなかった

この大らかな依存の安らいは得られなかった

この甘い思いや

さびしい思いも知らなかった

人はかかわることからさまざまに思いを知る

子は親とかかわり

親は子とかかわることによって

恋も友情も

かかわることから始まって

かかわったが故に起こる

幸や不幸を

積み重ねて大きくなり

くり返すことで磨かれ

そして人は

人の間で思いを削り思いをふくらませ

生を綴る

ああ

何億の人がいようと

かかわらなければ路傍の人

私の胸の泉に

枯れ葉いちまいも

落としてはくれない

あなたは人とかがわることが好きですか？
人とかがわることには得意ですか？

参加したみなさんに問いかけて、拍手で答えてもらいました。最初の問いには拍手があったのに、二つ目はパラパラ。人とかがわるのは、好きだけれど得意ではない。実は、私もそうです。気がつくとき、つかかかわりすぎてしまつて、自分も人も傷つけてしまうことが多い私です。「胸の泉に」にブルース調の曲をつけて、「かかわらなければ！」と叫ぶようにうたっているくせに、「かかわらないように、かかわらないように」とつぶやいています。

「かかわったが故に起こる幸や不幸」というところが、ぐっと迫ります。かかわることは、いいことも多い反面、ときに人をしぼり、しんどいこともある。真実をうたつてくれるこの詩に、救われる思いです。家族、親戚、友人、近所の人、職場の人、教会……。私たちの悩みの大半は、人とかかわりではないでしょうか。にもかかわらず、「かかわらなければ路傍の人／私の胸の泉に／枯れ葉いちまいも／落してはくれない」と詩人はうめきます。

塔 和子は、かかわりをたたれた瀬戸内海の小さな島で、生きる希望を求めて詩を書き始めました。やがて外の世界とのかかわりを求めて、ラジオや雑誌に投稿したところ、反響が反響を呼び、その名前が広まりました。塔 和子の詩は、ハンセン病文学の域を越えていると私は思います。生涯に残した約千編の詩の大半は、だれの心にもある思いをうたつてくれています。強制隔離という絶望の淵で、負の感情を

まずは自分に向けてから読む者へとさし出してくれる。鋭くえぐられながら包まれ、癒されるのです。私はそんな塔さんの詩が大好きで、全部を声に出して読み、八編を選んでCDへかわらなければ「塔和子をうたう」におさめました。

神学校時代に夏期伝道の一環としてひと夏を大島青松園で過ごした父、沢正彦が、生後六か月の私を抱いて初めて大島に連れて行ってくれたのは一九七一年のこと。「うつるから赤ちゃんは連れていくな」と周りに反対されても、「大丈夫だから」とふりきりました。全員完治して十年以上たった当時の誤った常識であり、善意から発せられた忠告でした。

子どもをもつことをゆるされなかつた入所者のみなさんは、赤ちゃんが島に来た夏の日のことをずっとおぼえていてくださり、おとなになつて再訪した私を涙で迎えてくださいました。人が人をおぼえている愛の大きさに、圧倒されました。以来、大島青松園は私の「故郷」になりました。二〇〇一年から毎年大島でコンサートもしています。二〇一四年の春には、いくつかの理由が重なって、私は千葉県から岡山に移住しました。大好きなみなさんのそばに行きたい思いが、背中を押してくれました。大島青松園には月二、三回通うようになり、みなさんと食べたり飲んだり、ときにけんかしたりしています。

二〇一五年の夏、約百年つづいた大島キリスト教霊交会（単立のプロテスタント教会）が礼拝を閉じました。高齢化で、最後の会員四人が

ぎりぎりまでがんばった末の苦渋の決断でした。最後の礼拝で奏楽をしながら、胸のざわめきをおさえられませんでした。終わりゆく教会にどう寄り添っていったらいいのか。一年考えて、この夏、月一回の礼拝を有志で再開しました。入所者の会員には負担をかけないかたちで。一九三五年のヴォーリス建築は、さんびかの声がよく響きます。床にしみこんだみなさんの汗のにおいが好きです。どこまでできるかわかりませんが、神さまの導きによって、淡々と礼拝をつづけていけたらと願っています。

私たちの神さまは、かわる神さまです。逃げ隠れしても、「あなたはどこにいるのか？」と追いかけてきます。日々ひとりひとりに具体的にかかわってくださいます。この小さな器を通して神さまがかかわる御業に、喜びをもつてアーメン！と用いられます。

大島青松園のコンサートで必ずうたう《故郷》。作曲者の岡野貞一は、十代で鳥取教会で受洗し、岡山でオルガンを学びました。教区の集いで参加者のみなさんといっしょにうたった《故郷》は、鳥取の美しい秋の空に響くようでした。

最後になります。教区の集いでは、私のボランティアコンサートの経費を支える「ともえ基金」へのカンパをいただきました。おかげさまでこの秋、宮城県沿岸、福島県、そして千葉の少年院にもうたを届けることができました。ありがとうございます。鳥取で私のうたがお役に立てることがありましたら、ぜひお声がけください。

第40回日本基督教団総会報告

「教団運営に多様な意見を」

鳥取教会 松田 章義

教団総会は、主題「伝道する教団の建設」―十字架の贖いを土台として―のもとに、東京で開催された。冒頭に石橋議長は「教会内外で危機が叫ばれている中で、公同の教会として主の命令（マタイ二八・一九―二〇）に忠実に従う決意を新たにしよう」と呼びかけ、また「伝道資金制度には、多くの課題が指摘されているので、それらを十分考慮して運用していきたい」など、柔軟な姿勢が示されたので、教団も徐々に変わっていくかと、淡い期待を持った。しかし、五一もの総会議案の提案・協議、時には怒号に包まれる中での採決は、ここ数年の経過と全く変わらない二〇〇票対一五〇票で、修正されることなく原案が承認されていた。

執行部三役の改選は、現体制の再任。総会に代わって教団運営を委ねられる常議員の選挙方法は、多様な意見が反映されるよう「半数連記」の提案があり、賛否、白熱した議論が続いたが、賛成一六一、反対一九六で否決された。矢張りとの挫折感とともに、地殻変動が起きたかのような感もあった。

二〇一五年度の決算、及び二〇一六年度の実行予算などについては、財務審査委員の一人として深夜まで、その任に当たった。

二〇一七年度予算は、支出全体の精査による二%の削減、宣教推進の予算強化などが提案、承認された。日程の中で、東日本大震災の被災教区への国内外からの一四・三億円の献金が、教会の再建や住民の生活支援などに有効に用いられたことの報告・感謝と共に、熊本・大分地震などへの更なる支援の要請が

あった。

三日間を通して、執行部側と改革側の双方の意見が激しく対立した。特に、沖縄教区との関係を再構築すること、北村教師の免職処分を撤回すること、伝道資金の運用の在り方など相違点が多く、分断・亀裂をどう修復・一致するか、大きな課題が残った。信徒の高齢化、信仰の後継者の不足など、深刻な「二〇三〇年問題」が語られる中で、「外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされる」(コリントⅡ・四・二六)のみ言葉に導かれ、伝道に励むことが求められている。

「ああ教団総会」

倉敷教会 丸山玲子

「心を合せて主を褒めたたえ、白熱した議論と互いを尊重し、各教会、教団の未来に向けて考え、祈りに満ちた教団総会であった。」

と報告できたならどんなに嬉しいことか！今回が初めてではなく数年前に一度出席させていたのだことはある。その時のひどい状態は忘れもしない。だから期待もほとんどなかった。しかしそれで良いのか？どうであれ教団総会は始まった。以前と同じ調子で。賛美は一つになれるのに協議はどうにもならない。いつからこうなのだろう。何をどう協議しても結論は決まっている。素晴らしい発言も、どうにもならないような発言も関係ない。すべて決まっている会議の虚しさ。聞くところによると以前あまりにも騒然となり、怒号が飛びかいホテル従業員も嘩然とするような総会であったから騒々しくならぬようにもうほとんど全て予め決まってしまうのか。どの議案の賛否もきれいに教区によって分

かれている。大体六対四くらいですべて分かれる。四の方は何を言ってもどんな提案も選挙も通らない。六の側はすべて可決される。おかしいほどきれいに分かれている。みな何も考えないのか！いくら以前大採めに採めたとしてももう少し違った方法はないものか。国会がそうであるからといって教会までそうなのか。どちらかがどうのといえるような問題ではない。なぜ歩み寄る努力さえやめてしまったのだろうか。信徒が望むのはそのような対立ではない。伝道、伝道というけれど言葉だけが上滑りしているように感じられた。伝道にはみな悩みながらも真剣に取り組んでいる。だがその困難さ／言葉だけでなく具体的な方法を語ってほしいと今回も願った。またやたらと教憲教規という言葉に耳にした。

「教憲教規によると」「教憲教規に反する」「教憲教規が」何度耳にしただろう。

「安息日(律法)は人のために定められた。人が安息日(律法)のためにあるのではない」と話された主の言葉を思っていた。

「教憲教規は教会のため、信徒のためにあるのであって、教会が、信徒が教憲教規のためにあるのではない」と置き換えて考えていた。確かに多くの宗派が寄り集まるとの教団はひとつになるのは理想ではあっても現実には厳しいものがある。しかし一億二千万人余りの日本人の中のとった八万三千人余りの日本キリスト教団信徒が採めるばかりでは宣教どころではないではないか。私たちは助け合って主を伝えたい。信徒はみなそれを願っている。このままの教団総会なら若い次の世代を送ることが出来ないではないかと思つた。諦めるのでなく共に考えていきたい。そんな中最終日に各地の女性たちがランチを共にした。ほとんどが初めての人ばかりであったが、何とも言えないたくましさや穏やかさを感じた。まだまだ大丈夫かもこの元気な女性パワーがあれば。

鳥取県中部を

震源とする地震報告

上井教会
倉吉復活教会 牧師 奥田 望



「十月二二日(金)十四時七分に鳥取県中部を震源とする地震が発生し、倉吉市内で震度六弱を観測しました」。倉吉市のホームページにもこのように記され、市の対応状況などがいまだ掲載されています。この大きな地震による死者がなかったことは非常に幸いなことでしたが、多くの方々が被災されたこともまた重たい現実です。

発生当初から、教区内外から多くの御心配の問い合わせ、お見舞いなどいただき、いまだに多くの方々がこの震災を覚えて、お祈りくださり、お支えくださっていますことを心より感謝いたします。

倉吉市内にある日本キリスト教団に属する三教会もそれぞれに大きな被害を受けています。

倉吉教会は建物の壁面に亀裂などが見られますが、大きな被害には至らなかったようです。

上井教会は外壁コンクリート部分の剥落、亀裂、内壁の剥落、亀裂などが多数あり、修理を要するものと考えられます。

しかし教会建物に関して言えば、倉吉復活教会の被害が一番深刻でした。外壁、掲示板の剥落、二階の窓のサッシの落下、玄関扉の倒壊、壁のはがれや、床面のズレ、建物全体のゆがみによるものであろう扉のさしみなど多くの被害がありました。現在はベニヤ板、ブルーシートなどでの応急処置を終えて、行政による正式な診断を待っている状況ではありますが、このまま修理して使い続けるといふことはかなり難しいだろうと考えており、解体業者などとも話を始めているような状況です。

本年度をこのことは別に教会の合同もしくは合併について検討しつつ歩んできました倉吉復活教会の現在の力では、被災建物を撤去するのが精一杯です。そのような状況の中、三教会の役員が集まって、倉吉復活教会の思いを受けとめようとしてくださったことは大きな励ましを受ける事ができたと感謝しています。まだまだ多くの課題が山積しているような状況ではありますが、着実に進んで行きたいと願っています。

また教会の建物だけではなく、そこに連なる教会員の中にも大きな被害を受けた方が多くおられます。住み慣れた家が大きな被害を受け、住み続けることが出来なくなってしまう方、家の一部を取り壊さざるを得なくなってしまう方、住み続けるためには屋根瓦、外壁、内装などの修理のために多額の費用が必要となる方など、様々な状況があります。倉吉市内だけでも多くの家屋に被害があり、これからの雨、雪の季節を前に遅々として進まず、なかなか無くならないブルーシート屋根の下にある不安を覚えずにはおられません。引き続き教区の交わりとして覚えていただければと思っています。

東中国教区按手礼式報告

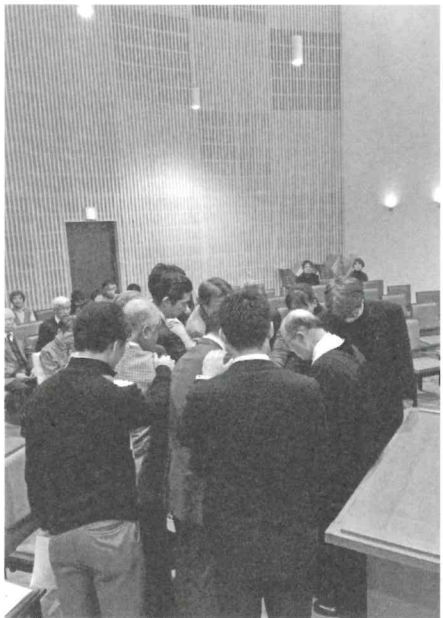
十一月二一日(月)、蕃山町教会において西川鉄也牧師の按手礼式が、嵐護総会議長の司式により執り行われました。式の中で西川牧師の志が語られた後に、十字架の前にひざまずき、会場に参列した正教師たちが西川牧師の頭と肩に手を置いて按手し、祈りが合わせられました。按手礼式と礼拝を終えてから茶話会へと移り、参列者の方々としばらくの歓談、そして西川牧師へお祝いの言葉が贈られました。按手礼式から茶話会に至るまで、主なる神さまを中心として、新しく正教師として立てられた西川牧師のために祈り、そしてお祝いする時を過ごしました。



按手礼を受けて

蕃山町教会

牧師 西川鉄也



このたび東中国教区で、按手礼の恵みを受けたことを感謝いたします。献身を志して神学校に入ってから、一つの目標でもあったので、按手礼を受けて正教師になったことは喜びであり、感慨があります。また按手礼式を準備し、出席してくださった教区の職員、先生方、蕃山町教会の方々に感謝いたします。

しかし、まだ牧師としてのスタートをきったにすぎず、これから困難なことも多いと思います。欠けも多く、日々の務めをこなしていくことだけでせいじっぱいでゆとりのない者ですが、ここまで神が導いてくださった恵みに感謝し、歩んでいきたいと思っております。

わたしは新潟で生まれ育ち、学生時代、社会人の時は東京で暮らし、ほとんど関東で過ごしてきました。西日本、中国地方、岡山で過ごすことは初めてであり、風土、自然も違い、貴重な日々を過ごすことができたい。特に岡山は著名なキリスト者を多く輩出してい

る所であり、その精神性にふれることは有意義でした。今、日本の伝道は、どこにいつても厳しいものがあると思いますが、イエス・キリストの福音は廃れることはないと思います。二〇〇〇年の昔から代々の聖徒は、この福音を語り継ぎ、信仰を継承してきました。そして、その中心にあるのはサクラメント、聖礼典です。プロテスタント教会は宗教改革以来、洗礼と聖餐のこの二つを大切にしてきました。正教師になったということはこの二つの聖礼典の執行が出来ると言うことです。それは喜びでもあります。責任も重いことです。

神は教会に様々な働き人を用いられます。伝道の働きは牧師一人の力でできるものではありません。神は教会員一人一人にそれぞれ賜物を与えてくださっております。その賜物を活かして足りないところは補い合い、助け合って伝道にあたっていければと思います。イエス・キリストを知り救われるものが一人でも多く与えられればと思います。

ここ半年ほどは正教師試験の準備の為落ち着きのない日々を過ごしてきましたが、これから地に足を付けた伝道と神学の学びができればと思います。今教会はアドベントの時を過ごしています。クリスマスに向けて世の中はうかれています。私たちクリスチャンはイエス・キリストがこの世に來られた意味を伝えていくことが大切であると思います。

今の世界は日本も含めて明るいことばかりでなく、格差、貧困、差別、紛争など人間の罪からくる多くの問題を抱えています。それは神を忘れた人間の姿です。イエス・キリストはその人間と神との和解のために來られました。人間の罪の赦しと平和のために來られました。神は争いを望んでおられません。そのためにイエス・キリストが弟子たちに、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさいと言われました。罪の赦しの洗礼とキリストの愛を伝えて行きたいと思

社会委員会主催

「辺野古新基地反対に連帯するゲート前座込み」

倉吉教会 牧師 柴田 彰

九月二六日の午後、普天間飛行場を一望できる佐喜真美術館に参加者九名（教職五名、信徒四名）が揃いました。フェンス傍で基地機能と歴史の経緯を学んだ後、館内で丸木位里・俊の描いた「沖縄戦の図」を鑑賞し解説を聞きました。夕方六時に普天間基地ゲート前に移動し、普天間バプテスト教会の神谷牧師がリードする「ゴスペルを歌う会」に参加。その後、辺野古に向かいました。宿に着いたのは九時を過ぎていました。夜は、ゴスペルと同じくらいの迫力のイビキだったそうです。

二七日朝八時三〇分に辺野古のキャンプシュワブゲート前に集合し、新基地建設強行に対する抗議行動に参加しました。私たちを含めて三〇人ほどの参加でした。抗議行動の中心は高江に移動していて、ゲート前の人たちは「お留守番隊」と自称していました。ゲート前では、通行する車に「新基地建設反対」「辺野古の海を守ろう」などのプラカードを掲げてアピールし、また座込んで集会をし参加者の意見交換をしました。時にはゲート前をシュプレヒコールしながら行進し基地内にいる関係者に新基地建設への抗議をしました。

昼食後、辺野古漁港傍に建てられている「テン

ト村」に行き、新基地の全体像と影響を学びました。その後、辺野古の対岸に移動し、海を眺めながら埋め立て予定地を仮想してみました。改めて広大な基地建設と自然破壊であることを実感しました。辺野古の海に出ることはできませんでしたが、ゲート前のテントでは、抗議活動の様子のパネル展示があり多くを学ぶことが出来ました。また、海上行動で船長をされていた方からもお話を伺うことが出来ました。当日の疲れと翌朝が早いこともあり、静かな夜だったそうです。

二八日朝五時四〇分に宿を出発し高江に向かいました。高江の米軍訓練場ではヘリコプターの離発着施設建設（通称ヘリパッド）が再開されており、新たに軍港を整備する新辺野古基地建設とリンクしています。そして当初説明のなかったオスプレイ配備が決められています。

六時二〇分に高江のゲート近くに着きましたが、すでに整列していた機動隊に制御され、車を降りてかなり歩いてゲート前に到着しました。六時から抗議集会が始まりました。地元住民の方や県南部から来た方の挨拶や報告、弁護に関わっている弁護士の状況報告と見通し等を聞きました。参加

者は二〇〇名を超えています。超えていますが、他県から動員された機動隊は五〇〇名を超えているそうです。沖縄返還時に歌われ、今も



歌い続けられている「沖縄を返せ」を歌ったり、替え歌でダンスをしたり、座ってばかりでは疲れるのでラジオ体操をしたりと、緊迫感の中にもユーモアのある集会でした。

九時過ぎに突如機動隊がゲート前に集結し座込み排除を強行しました。いわゆるごぼう抜きです。ゲート前を封鎖していた警察車両が移動し、機動隊が通路を確保し、砂利を満載した数十台の工事車両が敷地内に入っていました。ヘリパッド用地だけでなくアクセスする道路のための自然破壊も看過できません。機動隊に守られ、違法改造しているトラックも通過して行きました。無力感を隠すことはできませんでしたが、継続その力であることを思い、お互いに励まし合いました。

お昼になり午前の集会は一旦休憩。ゲート前での反対運動のリーダーから様々なお話を聞くことが出来、特に関心があった敷地内での工事と自然破壊を知ることが出来ました。敷地内は、日本が米軍に提供した地域と位置付けられていて、侵入者に対しては米軍が要請しない限り警察権力の発動はなく、防衛局の作業を妨害することに対しては排除がなされているとのことでした。

飛行機の都合もあり二九日早朝に辺野古を出ました。参加者それぞれが重い宿題を抱えながら帰路につきましたが、車窓から見える沖縄のきれいな海が暗い心を励ましてくれるように思いました。

教会紹介

岡山博愛会教会

牧師 渡辺真一

アメリカンボードの宣教師として来日した二十五歳のペティー・アダムス女史は、当時の花畑（現在の御幸町）を通りがかり、そこに生きる人々の生活状況の厳しさや、教育も受けられず不衛生な環境の中にいた子どもたちを見て、ここで神の働き手として力を尽くすことを決心しました。欧米人に馴染みがなかった当時の花畑では、アダムス女史が通るたびに、子どもたちがからかったり石を投げたりもしたそうです。しかしアダムス女史は懸命に誠意を尽くし、この地で徐々に受け入れられるようになりました。そして一八九一年十二月二十五日、子どもたちを招きクリスマスのひと時を過ごしました。これが岡山博愛会教会の創立の時となりました。全ての人を愛する、という福音の言葉を基とし、地域の人々の生活に仕えていくために岡山博愛会は幼児教育施設、小学校、和洋裁学校、医療施設などを建てていきました。こうして岡山博愛会は日本で最初のセトルメントとしての教会の歩みを成したのです。まだ「福祉」という言葉が一般に使われることもなかった時代にあつて、このような働きをなすためにどれほどの困難と苦労があつたかは計り知れないものがあります。

その後、一九四五年の岡山大空襲の焼失被害に

よって岡山博愛会は危機的な状況に見舞われましたが、多くの方々支えと共に戦後再び地域での働きを成していくことができました。そしてこの二〇一六年には創立一二五周年を迎えることとなりました。全ての人を愛し、地域の方々に仕えてきた精神を今も継承しつつ、教会をはじめ、保育園、病院、高齢者施設、在宅ケアなどの働きをなしています。福音の言葉と、愛の業。この二つを大切にしながら、私たちの教会と諸施設はこれからも神の働きの小さな枝として懸命に歩んでいきたいと願っております。



倉敷教会のベル

牧師 中井大介

現在、倉敷教会の会堂は築九四年目を刻んでいます。この会堂は第三代牧師である杉田讓二牧師が留学中に描いたグランドデザインがベースになっています。杉田牧師は、留学先から倉敷の信徒に宛てて、これから新しく建設される教会堂には日曜学校校舎と塔、そしてチャーチベルを設置してほしい、と書き送っています。やがて杉田牧師は留学中に召天しますが、遺志を受け継いだ信徒たちが無牧時代に現在の会堂の建設を成し遂げたのです。それは杉田牧師による三要件が全うされたものでした。ところが太平洋戦争末期の金属類回収令によってベルは供出され、戦後の混乱の中で失われてしまいました。

このたび倉敷教会では創立一〇周年を記念するにあたり、杉田牧師の三要件に欠けていたチャーチベルを復活させる運びになりました。かつてベルは戦争によって失われました。しかし、これからは二度と戦争のためにベルが取り外されることのないように、との平和の祈りを込めています。

イタリアに発注したベルは八月二四日の大地震の被災状況を乗り越えて十一月十六日に倉敷教会に到着しました。奉獻礼拝は十二月十八日(日)。それまでに四回の主日があり、その期間中はアドヴェントの装飾を施したベルを礼拝堂に置いて飾っていました。礼拝に集った方々がベルに触れ、実際に打ち鳴らせるようにしたのです。

礼拝のメッセージの中でもベルの話題をたびたび取り上げました。あるときには奇跡的にも礼拝中に教会の最年長(九九歳)と最年少(一歳)の方が出席されていたので、この瞬間を逃すまいとお二人を

礼拝中にベルの側へと招き出し、最年長の方に続いて最年少の幼子にもベルを打ち鳴らして、その響きを礼拝の中で会衆一同が味わうときとなりました。私たちの信仰を皆で継承していくことを象徴的に決意するような場面として記憶に刻まれています。また、竹中幼稚園の子どもたちにもベルの歴史的エピソードを語り、子どもたちが教会と幼稚園の歴史と、そこに生きた信仰の先達の生き様について親しむ時間をたっぷりと与えられました。礼拝堂の掃除の時にも誰かが会堂のベルを打ち鳴らすことが何度もありました。この期間中、倉敷教会では楽しい音擦れを味わう風景がたびたび発生したのです。その音色は、やがて近い将来に描き始める教会の塔からベルが響きわたるといふ倉敷の新しい音の景色を先取りする喜びの響きでもありました。教会のベルに親しむ時間は本当に素晴らしく、皆の魂が元気になるときでもありました。

杉田牧師は教会のベルについて「日本のお寺の鐘とは響きが違います。お寺の鐘はゴーン、ゴーン(Gone! Gone!)と、すべてが過ぎ去る無常感を伝えます。教会の鐘はカム、カム(Gone! Come!)と楽しいときが来るのを告げるのです」と言って教会のベルを熱望されました。これは教会建築に際して百年の計画を定めるための指針でした。また、杉田牧師の遺志を継承した倉敷教会の信徒も、現会堂を設計するにあたり一九二〇年代という「今」の必要を満たすためではなく、百年後の倉敷の街における必要を満たすために準備をする、ということ志して現会堂を設計していくのです。必死に祈り、献金して成し遂げた会堂建築でした。

さて、二〇二〇年代を目前にしようとしている「今」、私たちは杉田牧師や倉敷教会創設当時の信徒の熱情と祈りに応えられるような信仰を引き継いでいるでしょうか。百年後の人間は、キリスト教信仰によって美しく向上し、改善された生活の中で豊

かさを味わっている、ということを経験の先達は願っている、「今」を生き抜きました。その願った通りに私たちは生きていくでしょうか。若くして召された杉田牧師が生きていたかったはずの世界の延長線上に立つ信仰者として、つねに自分自身の原点を見つめていきたい。そして、さらなる百年後、人間が営む社会に向けて、「今、ここから」踏み出せる奉仕の内実を研ぎ澄ませていきたいと願っています。



編集後記

少しでもタイムリーな話題を求めて誌面構成を検討していく中で、唐突な原稿依頼が発生してしまふことがあります。執筆者の皆さまには、その都度お時間を割いてご対応くださり感謝申し上げます。読む人、書く人の双方にとって、有意義なニュース誌となるように鋭意努めて参りますので、どうか皆さまも「書く人」となりましたら、ご協力をよろしくお願い致します。

(A. F.)